

國學院大學學術情報リポジトリ

山本周五郎の「婦道」に関する一考察：
「笄堀」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 日本婦道記, 婦道, 笄堀, 女性像, 山本周五郎 キーワード (En): 作成者: 李, 曉玲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000074

山本周五郎の「婦道」に関する一考察

—「筭堀」をめぐる—

A Study on Syūgorō Yamamoto's "*Fudō*":
Focusing on "*Kōgaibori*"

李 曉 玲

キーワード：日本婦道記 婦道 筭堀 女性像 山本周五郎

Key Words: *Nihon Fudō Ki* Fudō Kōgaibori Female Image Syūgorō Yamamoto

要旨

「日本婦道記」は山本周五郎が講談社『婦人倶楽部』の要請に応じて、1942年後半から1946年前半にかけて連載されたシリーズ作品である。「筭堀」は1943年1月号に掲載された一編で、歴史上有名な「忍城の戦い」をモチーフとするが、作者による虚構や脚色も多い。史実と作者の虚構を見分けたところ、作者の意図がはっきり見えてくる。すなわち、戦時下の苦しい生活の中でもがいている女性たちに少しでも乗り越えていく力を与えることだと考えられる。

この小説の創作意図について、作者本人は積極的に戦争協力しようということではないと述べているが、戦時下の社会情勢においては、編集部や軍部などに宣伝物として利用され、戦争体制に協力している作品として読まれていたこともあるかもしれないと考えられ、客観的に戦争協力になった可能性は否定できない。

Abstract

Nihon Fudō Ki is a series of stories written by Syūgorō Yamamoto in response to a request from Kodansha's "Fujin Club", and serialized in the magazine from late 1942 to early 1946. *Kōgaibori* was published in the January 1943 issue and is based on the famous historical "Battle of Oshijō", but there are many fictions and adaptations by the author. When we distinguish between the historical fact and the author's fiction, we can clearly see the author's intention. That is, to give women struggling in the hardships of wartime life a little strength to overcome their difficulties.

Although the author himself stated that he did not intend to actively cooperate with the war effort in the creation of this novel, it is thought that under wartime social conditions, the novel may have been used by the editorial staff and the military as a propaganda piece and read as a work of cooperation with the war system, and it cannot be denied that it may have been objectively a work of war cooperation. The possibility that the work was objectively cooperating with the war regime cannot be denied.

はじめに

1942年講談社『婦人倶楽部』では「日本婦道記」というシリーズが企画され、当時同じ「四大女性誌」である『主婦之友』の「日本名婦伝」という企画に倣うものだとされている。山本周五郎(1903～1967)は7回のうち3回も担当した。それから1946年1月までに、このシリーズで総計27編の作品が掲載された。この一連の作品において様々な女性人物像が描かれてきたが、江戸時代のような泰平の世を舞台とするのが一般的であり、戦乱が頻発して不安定である戦国時代を舞台とする「筭堀」は特別な存在であると考えられる。

日本において、「日本婦道記」における女性像に関する研究は数多くある。木村久邇典氏は「日本婦道記」に登場する女性を「貫く女」、「尽くす女」、「つよい女」、「あたたかい女」などに分類した上で解説を行なっている⁽¹⁾。竹添敦子氏は「婦道」の語源、定着及び武士道との関係を詳しく説明した上で周五郎にとっての「婦道」は「夫のため子のために、心魂に打ち込んだ女の愛情である」⁽²⁾と指摘している。北影雄幸氏は「武家の女性の凛とした清冽さを描いた」⁽³⁾と評価している。しかし、「筭堀」の一編のみに絞って論ずるものは管見の限り見られない。中国においては、筆者の調べたところ、孫伏辰氏が「松の花」における女性像の特徴を「武家の女の自我否定と犠牲、また夫との絶対的な従属関係である」⁽⁴⁾と指摘したのが唯一で、「筭堀」に関する研究は見当たらない。

本稿は「筭堀」をめぐる、登場する女性人物像について考察を加えたうえで、周五郎の「婦道」すなわち「理想の女性像」について検討する。なお、「筭堀」は歴史上に実在した事件に基づいて書かれたが、虚構や脚色も多い。史実と作者の虚構を見分け、その中に潜めている作者の意図を掘り出す必要もある。その上で時局との関わり及び山本周五郎の立場について検討する。

作品の引用は『山本周五郎全集 日本婦道記・柳橋物語』(新潮社、1981年)による。

(1) 木村久邇典、『山本周五郎のヒロインたち』。文化出版局、1979年。

(2) 竹添敦子、『「日本婦道記」論』。双文社出版、2015年、p297。

(3) 北影雄幸、『山本周五郎作品の女性たち』。光人社、2004年、p29。

(4) 孫伏辰、『松花』作品中の武士家族女性形象研究。西安外国語大学学报、2012年02期。

一、「笄堀」における女性像

天正十七年（1589年）十一月、豊臣秀吉が関白太政大臣の権威をもって、北条氏討伐の令を諸国に発し、天下の諸雄はほとんどその旗下に馳せ参じた。翌年の三月には小田原城を包囲し、さらに石田三成、大谷吉継、長束正家らをして上野、武蔵、下総の諸国にある北条氏の属城を攻め落とすべく軍を進めさせた。北条氏は関東諸国にある属城の主たちを小田原へ召集した。城主たちは各々その兵の大半をつれて小田原城へ立て籠り、従って留守城は防備が手薄だった。「笄堀」のストーリーはその属城である武蔵国の忍城を舞台にして展開される。

このストーリーに登場する女性キャラクターは真名女と甲斐姫との二人であるが、真名女は主役であり、甲斐姫はその娘で出番が少ない。従って、本節においては、主に真名女の人物像について分析する。

（一）臆した心と苦闘する勇敢さと決断力

ストーリーの冒頭に、真名女が良人の成田氏長から館林の城へ合体するとの令を受けて躊躇するシーンがある。氏長は子息^{おっと}氏範と共に精兵五百余騎をしたがえて去り、城に残った兵はわずかに三百、あとは老人と幼弱者と婦人たちだけで、武器も足りなかった。真名女は氏長の留守を預かる時、この事実をよく承知していた。もし小田原が落城し、良人も子も討死して、関西の軍勢が押しよせて来るようになったら、城に火をかけて自害しようと心をきめていた。「成田氏長の妻として、太田三楽斎の娘として、世に恥じぬ死にかたをするのが自分のつとめである」と思ったからである。太田三楽斎は武蔵国岩付の城主であり、すなわち真名女は自分が武士の妻、武家の娘である以上、世に恥じる死に方してはいけないと思っている。

しかし、予期せぬ事態になり、良人と子息はまだ本城で戦っているのに、石田三成が三万の軍を率いて忍城へ向かっている。良人と合流するか、忍城を守り通すか、真名女は目の前に置かれた二つの選択肢で迷った。「良人が生きているうちは、預かった城をまもりとおすのが妻のつとめなのだ」と思いながらも、「三百にたらぬ兵と、充分でない武器とで、三万の敵軍に対抗することができるであろうか」と心配していた。しかし、情勢は切迫しており、ゆっくりと考える時間はない。真名女は半刻あまりの時間で忍城に残って戦い抜くことに決めた。

「軍の法もよくは知らないし、奇略とか妙策とかいうものもない、自分はごくあたりまえな女である、平凡なひとりの妻にすぎない、ただその平凡さをできるかぎり押しとおし、つらぬきとおすことよりほかになんのとりえもない、そしてそのかぎりなら自分にもできるはずだ」。弱さ脆さを吐き出した後の真名女は、落ち着き場を得た心の底からすこしずつ力が湧き上がってきた。その時まだ十四歳の娘である甲斐姫に良人の兜を捧げさせて、巽矢倉へ向かった。

この自分の臆した心との苦闘のシーンにおいて、大量な心理的描写が用いられており、読者は真名女に感情移入しやすいと考えられ、敵と対抗する真名女の不安に共感し、また彼女の決意を決める時の勇敢さにも感銘することは想像できると思われる。

（二）上下心を一つにする知略

巽矢倉には留守年寄の靱負之助をはじめ、成田康長、正木丹波、舟橋内匠、新田常陸介、成田次家などの旗がしら以下、番がしら格の者たち三十余人が集まっていた。彼らの多くは老人であり、実戦の経験もほとんどなかった。それに、事態の重大さに動揺されていることもたしかだった。新田常陸介が提言した「館林城へ合体するのが良策である」という意見に、ほぼ半数の者が賛成する一方、舟橋内匠は「おかた様のおほしめしどおりに」と言った。二派に分かれて激しく議論を戦わす中、真名女は三百の兵と共にこの忍城に残り、三万の敵軍を迎え撃つと決断を出した。これに対して、常陸介は「城のふせぎは備わず、武器は足らず、しかも僅かに三百の兵をもって、おかた様には、まことに三万の軍勢とおたたかいあそばすお覚悟でござりますか」、「それにはなにかおほしめす軍略でもござりますか、城の内外にある老幼婦女をどうあそばしますか」と追い詰めた。常陸介の激しい詰問に、真名女は次のように返した。

「常陸介はわらわをなんとみるぞ。」「わらわを女とはみぬか、ここにいる姫を少女とはみぬか。」真名女の気迫に満ちた力強い言葉で常陸介は言葉に詰まった。そう言って真名女は甲斐姫と共にうわぎを脱ぎ、下には鎧の腹巻をつけていた。彼女のその力強い言葉と率先垂範の行動に領民たちが励まされ、忍城の守りに決意を固めた。

そして、真名女は良人の兜をとって、忍城のあるじになることを宣した。この兜は城主である氏長のお着せ替えなので、城主の権威の象徴と見なされても良い

と考えられる。真名女の凛々しい姿に人々は嘆賞しながら等しく平伏した。真名女はこうして、敵とたたかうまえに、まず味方の備えを戦い取ったのである。翌朝、領内の民たちに忍城に立て籠もるべき心あれば老幼婦女にかかわらず、城に入るべきことを布令書で知らせ、真名女は甲斐姫とともに鎧に太刀を佩き、兜を持て城壁の上へあらわれた。領民たちはその壮美なすがたに心を撃たれ、新しく戦いの決意を誓い合った。外部の敵と戦う前に、頑固たる内部を築かなければならない。このシーンは真名女の知略を十分に表している。彼女は兵法軍略などを学んだかどうかは分からないが、武家の娘として幼い頃からその影響を受けている可能性は考えられる。

(三) リーダーとしての結束力

その後戦備がすぐに始められた。城壁の外廓に婦人たちだけで壕を掘り通しているところ、壕の中に筭が落ちていたことが気づかれた。「筭」は元々髪をかき分ける用具として男女とも用いたが、近世以後は女の髪飾となり、下げ髪をこれに巻きつけて結髪した⁽⁵⁾。このストーリーは1590年の事件に基づくもので、この「筭」は女性用のものだと認識されていたことは考えられる。それに、この「筭」は並ならぬ品であるため、婦人たちは「おかた様が日常お用いなされる品」と推測し、「おかた様がおしのびで、自分たちと一緒に壕を掘っている」ことを知った。この一本の筭に心を打たれた婦人たちは意気盛んに終りまでやり通した。一般的な認識においては戦争といえば男が活躍する世界で、女性とは大体無縁である。「筭」は女性の象徴であり、壕を掘る現場での「筭」は戦争という男の世界に入り込む女性の姿を象徴し、男にも負けぬ強さを表していると思われる。

家臣の靱負之助はこのことを聞いて、「忍城の御あるじとして、さような軽々しいお振舞いは不適切である」と思い、本丸へ確かめに行ったが、そこにいるのは真名女ではなく、母に代って甲冑をつけている甲斐姫だった。このシーンにおいて、真名女は登場しておらず、彼女に対する直接な描写もないが、作者は靱負之助を人々の代表のようにし、彼の口を通して人々の一般的な考えを伝える。すなわち城のあるじは尊い存在であり、普通の領民たちと一緒に働くとは想像も及ばぬほど不可能なことである。このような描写によって、真名女という人物の輪

(5) 平凡社『百科事典マイペディア』における「筭」の解説による。

郭は逆に際立っている。

後に三万の軍を持つ石田三成は勢いに乗って忍城へ侵入し、城を包囲して攻めてきたが、城はびくともしなかった。三成も忍城の堅固さに驚き、水避けの堤を利用して水攻めの戦術を行うつもりだったが、数日の豪雨で堤が欠壊し、城の周りが泥海となり、包囲軍は陣を後退させた。しかし、このまま包囲が続くと、城内の糧食は尽きるに違いない。石田軍はこれを待っていたが、附近の民たちは城とつながりをもっているので、石田軍の眼をぬけて城中へ食糧を運び込む。隙をみつけると陣へ火をかけたり、夜中突然宿所へ斬り込んだりした。その結果城を三十余日も守り通した。忍城の不落の要素は「将も兵も民も、老若男女が全部心をひとつにして戦ったこと」であり、そしてその心をひとつにまとめたものは、その一本の筭である。小説において、真名女が軍を指揮したり、戦場で戦ったりする場面は描かれていないが、彼女は城代、すなわち組織のリーダーとしてその役割を見事に果たしたと思われる。

（四）良人の意志に従って行動

秀吉と和を結び、忍を開城するようにと良人の氏長から手紙が届いた。家臣の中には、なお戦いぬこうという者が多かったけれど、真名女は良人の云いつけにそむく気はなかった。「するだけのことはした、下総守氏長の妻として、戦うだけは戦いぬいた、しかも合戦にやぶれて開城するのではない、良人の云うところに妻として従うのだ」と真名女は決めた。

前文にも見られるように、真名女が怖がりながらも城を守り抜こうと決めたのは、良人と約束したからである。開城するのも良人の言いつけによるものである。彼女本人の意思がどうであろうかは、小説において全然反映されていない。真名女は単なる一人の女性としてではなく、良人の意思にしたがって行動をとる妻として作り出されたのである。

（五）手柄を自慢せぬ謙虚の心

「まことにこのたびの御指揮ぶりは、老人などの思いもおよばぬ、みごとさでござりました」。靱負之助のこの言葉に対して、真名女は「城がせまいおかげでした」、「領民たちはよくはたらいてくれました」と謙遜していた。さらに靱負之助は「家臣の女どものなかに身を忍ばせて、その労苦をとものにあそばしたおかた

様の、一筋のお心がもとでござりました」と褒め称えるが、真名女は少しも自慢せず「それはもう云わぬ筈ではないか」と言った。また、領民たちが退城する際、「おかたさまのお姿を拝みたい」と集まり、真名女は「そのような晴れがましいことはいやだけれど」と言った。通常であれば、戦いに勝った後、部衆から歓声を受けるのが当たり前のようなことであるが、真名女は自分の手柄だと思っているので、領民たちの拝みを受けるのが恐縮だと思っていたと思われる。最後に真名女は「おそらくこれが城主として、領民たちを見る最後であろう」と思った。すなわち良人が帰ってきたら、彼女は一步さがって、また前のように、良人をかげで支えていくつもりである。

以上でわかるように、真名女は「筭堀」において、一人のごく平凡な女であり、武家の妻、武家の娘として危機に臨んで恐れず、多大なる勇気を持ち、リーダーとしての知略も結束力も抜群である。それにもかかわらず、良人の意思に従えて行動を取る。これはまさに連載名の「日本婦道記」の如く、周五郎にとって理想的な女性像、すなわち彼が思う「婦道」であると思われる。

二、「忍城の戦い」によるバリエーション

「筭堀」のストーリーは歴史上実在した「忍城の戦い」からバリエーションしたものだと考えられるが、史実とは異なる虚構や脚色したところはいくつかある。

まず、「真名女」という名の問題について説明する。小説において、真名女は自分のことを太田三楽斎の娘と言った。成田氏長は確かに太田三楽斎（太田資正）の娘と婚姻関係を持っていたが、その名は不明である。そして、筆者が調べた限り、「まなじょ」という女性の名前の用例は他のところに見られず、「真名女」という名は作者の山本周五郎が虚構したものだと推し量ることは可能だと思われる。「真名」というのはもともと「仮名」と対立して漢字のことをさす。周知のとおり、「真名」は平安時代に「男手」とも呼ばれ、男が使う文字だと認識されている。周五郎は女主人公の名を「真名女」と付けたのは偶然ではない。夫の不在＝男の欠席のため、女であるにも関わらず、危機に臨む勇氣と度胸は男にも負けないものであると、作者は伝えたいと考えられる。

次に、史実上、実際に指揮を執って城を守ったのは成田氏長の妻ではない。

『成田記』によれば、氏長は北条氏に味方して小田原城に籠城し、泰季に城代を務めさせたが、泰季が嫡男の成田長親を代わりに城代とするよう遺言を残して急死したため、奥方は甲斐姫と相談の上、一門と家臣を集め、泰季の子である長親を総大将とすることを命じたと記されている⁽⁶⁾。

それに、「筭堀」で出番が少ない甲斐姫だが、実は鎧兜を身に付けて出陣したことで有名である。『成田記』によれば、甲斐姫は自らが鎧兜を身に付け、成田家に伝わる名刀「浪切」を携え、200余騎を率いて出陣し、多くの敵将を討ち取ったとされる⁽⁷⁾。一方、氏長の妻に関する記載は少なく、この戦において女性として名を残したのは甲斐姫のみである。また、真名女の筭が壕の中に落ちて、婦人たちに発見されておかれた様子が自分たちと一緒に壕を掘っていることに感銘を受けたシーンがあり、このシーンは題名の「筭堀」と呼応して、題名の由来であると考えられるが、史実上関連する記載は見当たらない。故に、「筭堀」で描かれた真名女は史実ではなく、作者による創作だと思われる。

三、時局との照合

史実に即しながらも中に虚構を加えて物語を展開させる、これがいわゆる時代小説のことである。山本周五郎は「筭堀」において、実在した人物（氏長の妻）に虚構の名と行為を加えて、理想的な女性像を作り出した。史実とは異なる虚構のところにこそ作者の意図が読み取れると思われる。

「筭堀」の掲載時間は1943年1月ということから推測すると、執筆されたのは1942年だと思われる。1942年のミッドウェー海戦で戦局が逆転し、それからアメリカ軍は本格的に太平洋での反攻に出た。日本軍は不利な状況に陥った。「筭堀」の掲載時間と合わせてみると、武家の妻＝軍人の妻、忍城への攻略＝アメリカ軍の攻撃、城主である良人の不在＝夫が戦場へ、小説の設定と現実の状況を重ね合わせることできる。これは単なる偶然とも考え難いと思われる。

甲斐姫は男にも負けない武勇で伝説を残すほど有名だが、周五郎はなぜ甲斐姫ではなく、あえて母である真名女をヒロインとしたのか。それは真名女が武家の

(6) 小沼十五郎保道著、大澤俊吉訳・解説。『成田記』。歴史図書社、1980年、p166。

(7) 小沼十五郎保道著、大澤俊吉訳・解説。『成田記』。歴史図書社、1980年、p176。

妻、武家の母であるためだと思われる。甲斐姫は若い娘で、読者は彼女の武勇には感服するが、共感はし難い。一方、妻であり、母である真名女の場合、婦人雑誌の読者たちは容易に自分を投影することができる。夫は戦場へ駆けて不在、女手一つでこの家を支えなければならないが、戦争の終わりが見えず、極不安定な暮らしを送っている主婦たちは精神的にも経済的にも苦しい。読者たちは真名女をみて、少しでも励まされ、勇気もらえて立ち直すことができれば、と作者は思ってこの小説を書いた可能性があると考えられる。

一方、「筍堀」は『婦人倶楽部』で連載されたもので、「日本婦道記」という連載の企画意図についても改めて考察すべきだと思われる。「日本婦道記」の名を冠せられるのは、1942年の『婦人倶楽部』6月号に発表された「松の花」が最初であり、その後連作発表されていた。しかし、山本周五郎の日記によると、この連載の名は最初から「日本婦道記」ではなく、「名婦伝」と記されている。

十月二日

名婦伝第三「箭竹」三十枚昨日大和に渡す、六回のもので三回予が書きし訳。
しかしお蔭で佳作が三篇できぬ。

——『戦中日記』一九四二年⁽⁸⁾

「婦道」ということばをシリーズ名につけたのが山本周五郎本人ではないことは明らかである。竹添敦子氏の考察によれば、「日本婦道記」というシリーズ名は雑誌編集部によって決められたもので、実際「日本婦道」ということばが初めて使われたのは1935年6月号の『日本婦人』に掲載された「第一回日本婦道講習会開会」という文である。この『日本婦人』は軍の影響が強い雑誌であり、ゆえに「婦道」という言葉は軍や政府各省の肝煎り団体で使用されていた可能性がある⁽⁹⁾。おそらく『婦人倶楽部』編集部は軍部の圧力の下、この企画を打ち出すことになったと考えられる。

また、昭和54年度「全国戦災史実調査報告書」によると、1942年12月28日、日本出版文化協会が単行本5割、雑誌4割の用紙割当ての大幅減配を決定し

(8) 山本周五郎、『戦中日記』、角川春樹事務所、2011年、p34。

(9) 竹添敦子、『「日本婦道記」論』、双文社出版、2015年、p54。

た⁽¹⁰⁾。戦時において軍部の発言権がつよく、雑誌などのメディアに対する統制もひどかった。それだけではなく、当時の軍部は「新しい武士道」と「女の武士道—婦道」を立てようとしていた。同じ『婦人倶楽部』で連載をしていた文学者の伏見猛弥と浅野晃の対談から軍部のその野心がうかがえる。

要するに、われわれは大東亜共栄圏においてアジアの武士階級になるのですから、ここで一つ新しい武士道を確立し、新しい婦道を確立しないといけませんね。さうでないと他民族を指導するなんてことは到底できるものではありません⁽¹¹⁾。

このような情勢の中で、「筭堀」が無事に連載できること自体、当局の意図がはっきり見られると思われる。婦人雑誌は当時テレビやインターネットのない時代の主婦ないし若い女性たちにとって、もっとも重要な情報源であり、その影響力は極めて大きいと考えられる。前文で述べたように、主人公「真名女」は臆した心と苦闘する勇敢さと決断力を持つと同時に、夫の意思にも従え、かつ謙遜な武家の女である。これはまさに軍部の「新しい婦道を立てる」の要請に合致し、ストーリーの展開も現実の情勢と照合し、当局にとっては思うつぼだったと考えられる。

四、山本周五郎の立場

では、作者である山本周五郎にとっての「婦道」とは何か、また彼はどのような意図で「筭堀」ないし『日本婦道記』の一連の小説を書いたのであろう。

周五郎は『小説の効用』において、読者に対して次のような言葉がある。

日本の女性が一番美しいのは、連れそっている夫も気付かないというところ非常に美しくあらわれる……これが日本の女性の特徴ではないかと思つてあの一連の小説を書きました。日本の女性はしとやかで大変おとなしく、

(10) 社団法人 日本戦災遺族会。昭和54年度「全国戦災史実調査報告書」。

(11) 伏見猛弥・浅野晃。「日本の妻 日本の母 対談」、『婦人倶楽部』。昭和18年9月号、p86。

夫に仕え、親に仕え……、それは事実でしょうけれども、しかしもし不当な犠牲を強いられたら、日本女性だって、そんな不当な犠牲に甘んじているはずはありません。私はそうではなく夫も苦しむ、その夫が苦しむと同時に妻も夫と一緒に一つ一つの苦難を乗り越えていく、という意味で、あれだけの一連の小説を書いたのであります⁽¹²⁾。

以上の言葉で明らかになるように、周五郎から見れば、日本女性の美しさはしとやかで大変おとなしく、夫に仕え、親に仕えるところにある。「日本婦道記」においてもこのような特徴を持つ一連の女性像を作り上げてきた。「斧堀」における真名女は多大なる勇気を持ち、リーダーとしての知略も結束力も抜群であるが、良人の意思に従えて行動を取る。これはまさに周五郎にとって理想的な女性像、すなわち彼が思う「婦道」であると思われる。

竹添敦子氏は、「山本周五郎は積極的な戦争協力はしなかった。従軍作家にもならなかったし、文芸銃後運動と称した時局講演をすることもなかった。文学報国会に所属していたが、それこそ形式的なものであったようだ。『文学報国』に名前を探すのも難しいくらいである」と指摘している⁽¹³⁾。また、志水富夫氏は「消極的な戦争協力と言えないことはないが、当時の挙国一致の狂熱的国民精神の異常な高揚を思う時、時局迎合の作家たちの多かった中で、立派だった」と評価し、周五郎自身も「戦争協力の小説はついに一編も書いたことがない」と指摘している⁽¹⁴⁾。

確かに、多くの作家は当時の軍国主義的な風潮に巻き込まれ、中日戦争や太平洋戦争を闘い抜いた男性たちの物語として、例えば火野葦平の『麦と兵隊』や岩田豊雄の『海軍』など、国策に便乗した作品を華々しく登場させ、その存在やら苦悩やら数多く表現されている。それに対して、周五郎は焦点をそこから外し、それらの男の栄光を「柱を支える土台石のように、いつも蔭に隠れて終ることのない努力に生涯を捧げ」（「松の花」）支えている、銃後を守る多くの女性たちを書き立てた。山本周五郎自身は積極的に戦争協力しようと言う発想からこの一連の

(12) 山本周五郎、『小説の効用：随筆』、新潮社、1963年、p111。

(13) 竹添敦子、『「日本婦道記」論』、双文社出版、2015年、p67。なお、『文学報国』は社団法人日本文学報国会の機関誌である。

(14) 志水富夫、『言語と文藝：夜の寝覚論・山本周五郎論・国語教育論：志水富夫論文集』、おうふう、2013年、p166。

小説を書いたわけではないと思われる。

しかし、『婦人倶楽部』に掲載されている作品なので、向ける読者は主婦あるいは女性に違いない。戦時下の情勢を考えてみれば、物質的にも精神的にも窮屈な生活を送っている女性たちが、これらの作品を読んだ途端、自分が置かれている状況と関連せずにはおかないと考えられる。尚且つ、前述したように、作品の中には、時局と照合しているような、現実の出来事と彷彿させるようなところが何箇所も見られる。また、『婦人倶楽部』1944年7月号においては、「皇国女性必読の名著」という言葉を『小説 日本婦道記』⁽¹⁵⁾の宣伝語として使われていた。

実は、「日本婦道記」が直木賞に推奨されたのがその時代状況と無関係とは言い難いと考えられる。竹添敦子氏が当時の選考委員である浜本浩の「この作者が、謙恭に、真摯に、今日の国家理念に確りと立脚して、至難の仕事に対する態度を尊く感じた」という選評によって指摘しているように、「この直木賞そのものの選ばれ方が時代の要請であったことは明らかである」⁽¹⁶⁾。周五郎本人は賞を辞退した理由について「この賞の目的にはなにも知りませんけれども、もっと新しい人、新しい作品に当てられるのがよいのではないか、そういう気がします」⁽¹⁷⁾と書いたが、竹添敦子氏は「直木賞辞退に対しては加えて審査員の顔ぶれへの不満もあろう」⁽¹⁸⁾と指摘している。そのほかに、時局と合致したので選ばれたことに対する抵抗も原因の一つだと推測される。

以上で述べたように、山本周五郎自身は積極的に戦争協力しようという発想からこの一連の小説を書いたわけではないと思われる。しかし、この一連の作品は戦争体制に協力している作品として読まれていたこともあるかもしれないと考えられ、客観的に戦争協力になった可能性は否定できない。

おわりに

本稿は、山本周五郎の文学生涯において重要な位置を占める前期の代表作である「日本婦道記」の中の代表的な一編である「斧堀」を例にして、主人公の女性像

(15)『小説 日本婦道記』は雑誌で発表した十編の作品を講談社が単行本で出版したときの書名である。

(16) 竹添敦子、『「日本婦道記」論』、双文社出版、2015年、p152。

(17) 齋藤慎爾、『周五郎伝 虚空巡礼』、白水社、2013年、p280。

(18) 竹添敦子、『「日本婦道記」論』、双文社出版、2015年、p152。

を分析した上、史実と現実のはざまにいる作者である山本周五郎の女性観、すなわち作者が思う「婦道」とは何か、また創作の立場についても論述した。

真名女は『日本婦道記』で描かれている女性の一人に過ぎないが、蛇首を見て長短を知るが如く、この一編を通して作者が描こうとする女性像の一面が窺えると思われる。「筭堀」の真名女は男にも負けず、危機に臨んで冷静沈着に対処できる勇敢な女性である。「筭堀」は歴史上実在した「忍城の戦い」からバリエーションしたものだと考えられるが、史実とは異なる虚構や脚色したところに作者の意図が読み取れる。すなわち戦時下の苦しい生活の中でもがいている女性たちに少しでも乗り越えていく力を与えることだと考えられる。

この小説の創作意図は積極的に戦争協力しようということではないと山本周五郎本人は述べているが、戦時下の社会情勢においては、編集部や軍部などに宣伝物として利用し、戦争体制に協力している作品として読まれていたこともあるかもしれないと考えられ、客観的に戦争協力になった可能性は否定できない。

参考文献

- 山本周五郎. 山本周五郎全集第二巻『日本婦道記・柳橋物語』. 新潮社, 1981年。
 山本周五郎. 『戦中日記』. 角川春樹事務所, 2011年。
 山本周五郎. 『小説の効用：随筆』. 新潮社, 1963年。
 竹添敦子. 『「日本婦道記」論』. 双文社出版, 2015年。
 木村久邇典. 『山本周五郎のヒロインたち』. 文化出版局, 1979年。
 北影雄幸. 『山本周五郎作品の女性たち』. 光人社, 2004年。
 小沼十五郎保道著, 大澤俊吉訳・解説. 『成田記』. 歴史図書社, 1980年。
 志水富夫. 『言語と文藝：夜の寝覚論・山本周五郎論・国語教育論：志水富夫論文集』. おうふう, 2013年。
 孙伏辰. <松花>作品中的武士家族女性形象研究. 《西安外国语大学学报》, 第20卷第2期, 2012年6月。